

行動志向の英語教育における文法指導

能登原 祥之

1. はじめに

新学習指導要領では、(1)知識及び技能、(2)思考力・判断力・表現力、(3)学びに向かう力、の3本の柱に加え、「主体的・対話的で深い学び」の実現、など新たな教育方針が示されました。また、英語科教育においては、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)が導入され、小中高大の接続を念頭に英語教育を進めていくよう準備が進められています。特に、(1)知識及び技能関連では、話すことが「発表」と「やり取り」に分けられ、4技能4領域から4技能5領域へと指導内容が見直され、言語活動を中心とした指導法及び評価法が現在模索されています。

昨年 CEFR でも補遺版(Council of Europe, 2018)が公表され、言語活動に媒介(mediation)という領域を設けたり、知識及び技能では、書くことの「やり取り」やオンラインの「やり取り」を設けたりするなど、より現実世界を反映したものに見直されています。今後、行動志向(action-oriented)の英語教育が一層求められ、そのあり方が議論されていくと思います。その際、ふと疑問が浮かびます。今まで日本の英語教育で重視されてきた文法指導はどうなるのかということです。本稿では、行動志向の英語教育が進む中での文法指導を少し整理したいと思います。

2. コミュニケーション能力と文法

コミュニケーション能力(communicative competence)については、昔からいろいろと議論され、その構成能力については諸説あります。CEFR では、そのような議論をふまえ、(1)言語能力(語彙、文法、意味、音韻、綴り字、など言語知識と技能)、(2)社会言語的能力(丁寧表現やレジスターによる表現の違いなど社会的に慣習化した言語知識と技能)、(3)語用論的能力(談話の流れをコントロールできる談話知識と技能や発話行為など言語機能を使いこなす知識と技能)と主に3つの能力でコミュニケーション

能力を捉えています(Council of Europe, 2001, pp.108-130)。この中で、いわゆる文法能力は、(1)言語能力の中の1つに位置付けられます。このことをふまえると、コミュニケーション活動を行う上で、特に文法の正確性(grammatical accuracy)を身に付けるだけでは不十分で、他にも(2)や(3)のような状況を判断し柔軟に対応する言語使用能力も共に身に付けていく必要があることが見えてきます。

3. 言語機能と語彙・文法パターン

次に疑問となるのが、(1)(2)(3)の能力をどのように関連付けて学んでいくべきかです。1970年代にヨーロッパで最低限身に付けるべき言語機能リストの敷居レベル(the threshold level)がまとめられ、1990年代後半に改訂されました(van Ek & Trim, 1998)。CEFRもこの言語機能リストに従っています(Council of Europe, 2001, pp.125-126)。例えば、不満を漏らす場合で幾つか用例を列記してみます。

(1) expressing dissatisfaction

a. declarative sentences

This soup is cold.

The TV doesn't work.

b. I'm not satisfied/happy (with this+NP)

I'm not happy with this fridge.

c. I don't like/want this (+NP).

I don't want this soup.

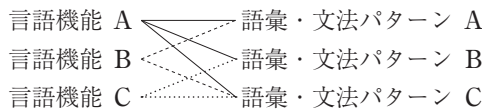
van Ek & Trim (1998, p.36 から抜粋)

a. のように、肯定文(declarative sentences)で間接的に不満を漏らす表現、b. のように、**I'm not happy with this+NP**(名詞句)といった語彙・文法パターン(lexico-grammatical patterns)で直接的に不満を漏らす表現、など様々な表現が言語機能と関連付けられリストにまとめられています。

4. 言語機能重視の指導アプローチ

上記の指導内容の性質をふまえ、言語機能重視の指導アプローチをまとめると図1のように整理できます。まず、言語機能重視の「強い立場」に立つ場合、特定の言語機能を指導目標に掲げ関連の複数の語彙・文法パターンを指導するアプローチとなります。一方、「弱い立場」に立つ場合、語彙・文法パターンを指導目標に掲げ様々な関連の言語機能を指導するアプローチとなります。

「強い立場」のアプローチ



← 「弱い立場」のアプローチ

図1 言語機能重視の2つの指導アプローチ

言語機能重視のアプローチの枠組みで考えると今までの文法指導は「弱い立場」と整理できます。授業では、まず、語彙・文法パターンの形式面に焦点をあて、使って見せながら教え(presentation)、次に、機械的な練習を通して生徒が文法的正確性を身に付けることを目指し(practice)、最終的に、状況を設定して学んだ文法を使い行動することを促す(production)流れとなります。

一方、行動志向の英語教育では、コミュニケーション重視で「強い立場」にまず立ちます。そして、タスク中心の指導法(task-based language teaching)を通して、実際に言葉を使いながら言語機能を指導していくこととなります。その際、文法の正確性の指導は、主にコミュニケーション活動の前後で、活動を下支えるために関連の語彙・文法を指導していきます。このように、行動志向で英語教育を考える際、基本的には「強い立場」で授業を進め、補足的に「弱い立場」で指導する形となります。しかしながら、「強い立場」か「弱い立場」かのアプローチの選択については、学校の教育方針や指導する生徒の生活環境と学習ニーズをしっかりと見定めながら、柔軟に使い分けていく必要があります。

5. 言語機能重視指導用の関連付けリスト

指導内容となる言語機能と語彙・文法パターンの関連付けリストについては、世界の英語教師を対象

に調査し作成された Pearson GSE Teacher Toolkit (<https://www.pearson.com/english/about/gse/teacher-toolkit.html>)があります。このサイトの学習目標(Learning Objectives)セクションを利用すると CEFR レベル別に関連の CAN-DO ディスクリプタを検索できます。また、文法セクション(Grammar)を使えば、文法と CAN-DO ディスクリプタとの関係を CEFR レベル別で確認できます。例えば、A1(10)-A2(36)レベル、助動詞(modal verbs)、要求・提供・許可(requests, offers, and permission)と選択し検索すると、6種類の CAN-DO ディスクリプタが見つかります。その1つ A2(30-35)レベル Can give, deny, or ask about permission in the present and near future with 'can'を確認すると、用例(e.g., Can I have some more?)が紹介され、さらに他の関連の CAN-DO も示され、サンプルワークシートなど教育資料までも確認できます。語彙セクション(Vocabulary)も同様の手順で検索できます。

また、最近では English Grammar Profile (EGP) (<https://www.englishprofile.org/english-grammar-profile/egp-online>)の研究プロジェクトが進み、第2言語学習者による言語機能と語彙・文法パターンの使用状況についての情報も公開されています。この教育用資料を参照すると、学習者が使用する文法項目の熟達度を CEFR レベル別に探ることができます。ただし、この資料の情報はあくまで目安で、実際に言語機能を指導した後は、生徒がどのような語彙・文法パターンを使いやすいか(またはエラーを起こしやすいか)経験知を積み重ね、現実に合わせて随時充実させていく必要があります。

6. 言語機能重視の教育文法書の記述

今回は、最近の言語機能重視の教育文法書の記述を確認してみます。

6.1 言語機能

COBUILD English Grammar(Collins, 2017)は、言語機能重視のアプローチ(functional approach)の方針のもと、章立てを言語機能で思い切って整理し、それに紐付ける形で文法項目を紹介しています。「1章 人や物について語る」では、伝統的には章立てで扱われていた名詞、代名詞、決定詞、などが、言語機能に関連付けられ紹介されます。例えば、

「名詞の後に情報を追加する」の用例の示し方は以下の通りです。

(2) Adding information after the noun

- a. a girl in a dark grey dress.
- b. the man who employed me.
- c. the room upstairs.
- d. the desire to kill.

Collins (2017, p.5)

このように、1つの言語機能(名詞に情報を追加する)だけでも様々な語彙・文法パターンが紐付けられ紹介されています。

6.2 レジスター

レジスター(register)とは、言語が使用される使用域のことで、最近の辞書や文法書には、どのような場面でその表現が用いられるかを示すマーカー(e.g., S1, W1, AWL)や解説がコーパス(言語データ)に基づき記述されています。例えば、*English Grammar Today* (Carter, McCarthy, Mark, & O’Keeffe, 2011a)では、仮定法で if が省略され倒置が起こる場合の用法について、公な場面(formal situations)で使うことがあると説明し、場面を想像しやすい用例が以下のように紹介されています。

(3) **Should you wish to cancel your order, please contact our customer service department on 02317 6658932.**

Carter, McCarthy, Mark, & O’Keeffe
(2011a, p.146)

6.3 発話行為

言語機能の中でも特に「やり取り」で重要となる発話行為(speech acts)に注目します。例えば、コーパスに基づく英文法書 *Cambridge Grammar of English* (Carter & McCarthy, 2006)では、様々な人の気持ちを表現するモダリティ表現(modal expressions)が肯定文や疑問文で使われると、しばしば行為指示型(命令, 指示, 提案, 助言, 警告, 要求)や行為拘束型(約束, 提供, 勧誘)などの発話行為として働く」と説明されています。

(4) Modal expressions and speech acts

- a. **Could you just hang on a second, Joan?**
- b. **Here, I’ll carry that for you.**

Carter & McCarthy (2006, p.684)

近年では、定型表現(formulaic sequences)と発話行為に関する研究も進み、少しずつ文法書にも記述されるようになってきています。また、TED corpus (<https://yohasebe.com/tcse/>)などマルチモーダルコーパスを使うと、話し言葉における定型表現と発話行為との関係を動画を通して探索できるようにもなっています。

7. 言語機能重視の英語教材

最後に、最近の言語機能重視の英語教材の動向を確認してみます。

7.1 Matching Practice

例えば、以下のような英文の場合、どのような発話行為が発話に含まれているかマッチングする練習(matching practice)があります。

(5) Why don’t you use different software?

That one’s not very good for photographs.

[warning, suggestion, request, offer,
promise, command, instruction]

Carter, McCarthy, Mark, & O’Keeffe
(2011b, p.142)

why don’t you の定型表現が使われていることからわかるように、この中では suggestion を最も適切な発話行為と合致させる練習となっています。

また、You’ve forgotten your watch. という状況(external context)が与えられ、その際、どのような要求表現を選ぶべきか考え判断するという練習。答えとしては、Could you tell me the time? が適切な表現とする練習となっています(ibid., p.145)。

7.2 Focused Practice

English Grammar in Use 5th edition (Murphy, 2019)の I will と I’m going to の区別など特定の用法に焦点をあてた練習(focused practice)を見てみると、以下のような工夫が見られます。

- (6) A : I forgot my wallet. I don't have any money.
 B : Not to worry. _____ you some.
 (I/lend) Murphy (2019, p.47)

この例では、財布を忘れた A がお金がなくて困っている状況で、B は、「心配ないよ。ぼくが貸すから」と言っている場面。B は、A の状況を察知して、今決断して(decision now)言っている状況なので、I'll lend you some. と応える練習となっています。

このように、一見穴埋め問題のように見えますが、心理状況(mental context)や行為の連鎖(sequence organization)をふまえ、どの表現が場面に適切か考え判断し、自分の気持ちを表現することを促す工夫が込められていることがわかります。

7. 3 Focused Task

English Unlimited (Tilbury, Clementson, Hendra, & Rea, 2015) CEFR A2 レベルの教材では、各課で文法項目に焦点をあてたコミュニケーション重視のタスク(focused task)が準備されています。例えば、Across cultures Greetings では、様々な国の挨拶について語る、をテーマによく練られたタスクが準備されています。

- (1) 挨拶に関する語彙・表現と絵とのマッチング。
 - (2) a. Seung-wan が韓国の挨拶について語っているのを聴き取り、現在形(e. g., Two male friends usually ...)を使って要点をまとめる。
 b. Paul がイングランドの挨拶について語っているのを聴き取り、同じように現在形を使って要点をまとめる。
 - (3) 自分の国の挨拶についてペアで語る。
 - (4) 他の国の挨拶の仕方について語る。
- Tilbury, Clementson, Hendra, & Rea (2015, p.15)

いろいろな国の挨拶について語るという場面を設定することで「紹介する」「現在形」「文化比較」を関連付けている点、また、他の文化を知り、自国の文化を紹介するという流れにしている点などは、自然な言語使用状況をふまえよく練られています。

8. おわりに

行動志向の英語教育では、「強い立場」の言語機

能重視の指導アプローチが主流になると思われます。ただし、初級者を対象とする場合は、発話量を求める Focused Task は難しく感じると思います。そこで、そのような時は、「弱い立場」に立ち、教科書の語彙・文法表現をきっかけに Matching Practice や Focused Practice などを通して言語機能への関心を少しずつ高めることがまず先決のように思います。その後、学んだ英語表現を「自分でも使ってみよう」という気持ちが少しでも生徒に芽生えれば、その教育的意義は大きかったと言えると思います。

参考文献

- Carter, R., McCarthy, M., Mark, G., & O'Keeffe, A. (2011a). *English grammar today*. Cambridge University Press.
- Carter, R., McCarthy, M., Mark, G., & O'Keefe, A. (2011b). *English grammar today workbook*. Cambridge University Press.
- Collins COBUILD. (2017). *COBUILD English grammar 4th edition*. London, UK: HarperCollins.
- Council of Europe. (2001). *Common European framework of references for languages : Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.
- Council of Europe. (2018). *Common European framework of references for languages : Learning, teaching, assessment. Companion volume with new descriptors*. Council of Europe. Retrieved from <https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>
- Murphy, R. (2019). *English grammar in use 5th edition*. Cambridge University Press.
- Tilbury, A., Clementson, T., Hendra, L. A., & Rea, D. (2015). *English unlimited. A2 elementary coursebook with e-Portfolio*. Cambridge University Press.
- van Ek, J. A. & Trim, J. L. M. (1998). *Threshold 1990 : The revised and corrected edition*. Cambridge University Press.

(同志社大学 教授)